

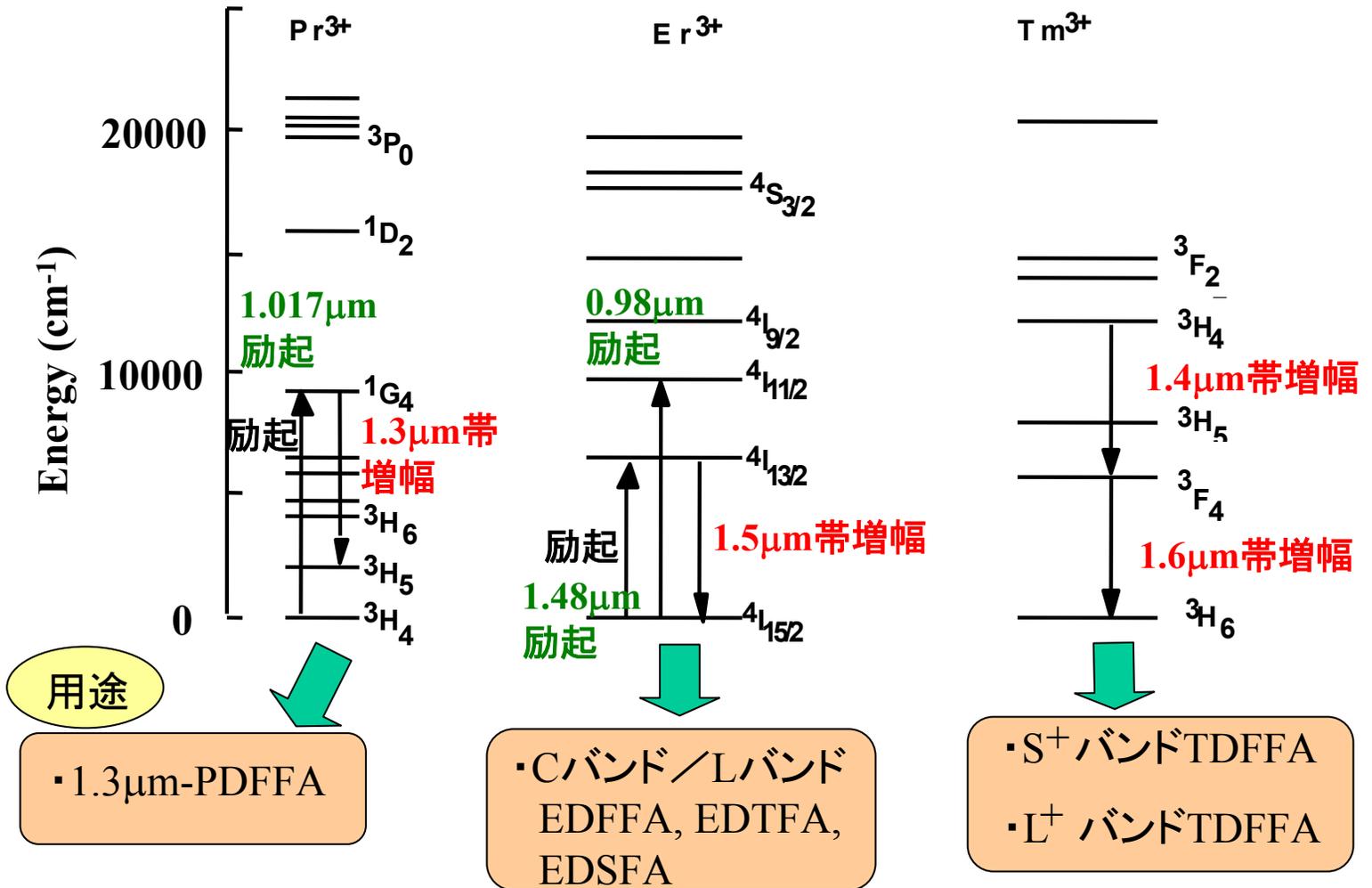
第11回

光増幅器(2)・WDM伝送技術(1)

2010年1月14日(木)

いろいろな光増幅器

Pr, Er, Tmイオンのエネルギー準位



* ○○FFA: フッ化物光ファイバ増幅器

○OTFA: テルライト系光ファイバ増幅器

○OSFA: 石英系光ファイバ増幅器 ○○はPD, ED, TD

光ファイバ増幅器(EDFA)の仕様

信号光波長 : $1.55\mu\text{m}$

適用波長 : $1.535\mu\text{m} \sim 1.560\mu\text{m}$

利得 : 20 ~ 30dB

雑音指数(NF) : 5.0dB

飽和光出力 : +20dBm

伝送路損失 : 0.2dB/km

伝送路分散 : 0.5ps/nm/km

励起波長による特性差

波長	1.48 μ m	0.98 μ m
光源	InGaAsP/InP MQW-LD	InGaAs/GaAs $\overline{\text{MQW-LD}}$
利得効率	5dB/mW	10dB/mW
雑音指数	5.5dB	3~4.5dB
飽和光出力	+20dBm	+20dBm
励起波長範囲	1.47~1.49 μ m (20nm)	0.979~0.981 μ m (2.5nm)
励起光出力	< 400mW	< 350mW

L帯EDFAの利得スペクトル

- ・平均の反転分布を低い状態で使用。
- ・利得平坦度3dBの増幅帯域はEDTFAが最も広い(1.56 μm ~1.61 μm)



M. Yamada et al., Electron. Lett., 33, pp. 710-711, 1997

広帯域EDTFAの増幅特性

- ・1.48 μm 励起EDTFA+利得等価器
- ・3dB以下の利得平坦度: 1.534 μm ~1.606 μm (72nm)



A. Mori et al, in OFC'97, paper PD-1

利得透過型TDFFAの増幅特性

- ・ツリウムドープ: 1.4 μm 帯用
- ・アップコンバージョン励起法による反転分布の高維持

課題

- ・変換効率の向上
- ・増幅帯域の長波長側への拡大 \rightarrow 1 μm , 1.55 μm 励起光同時入射+長尺化(NEC笠松ら)

T. Kasamatsu et al., in OAA'99,
paper PD1



T. Sakamoto et al., in OAA'99, paper WD2.

利得透過型PDFFAの増幅特性

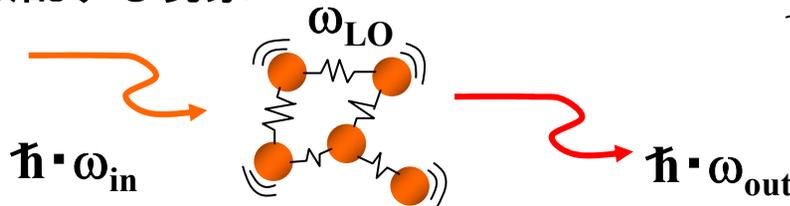
- ・プラセオジウムドープ: 1.3 μm 帯用
- ・PbF₂/InF₃系PDFFA(下図)
- ・ZBLAN系に比べてフォノンエネルギー低い → 量子効率高いのが特徴



Raman増幅器の特徴

信号光波長と励起光波長の関係

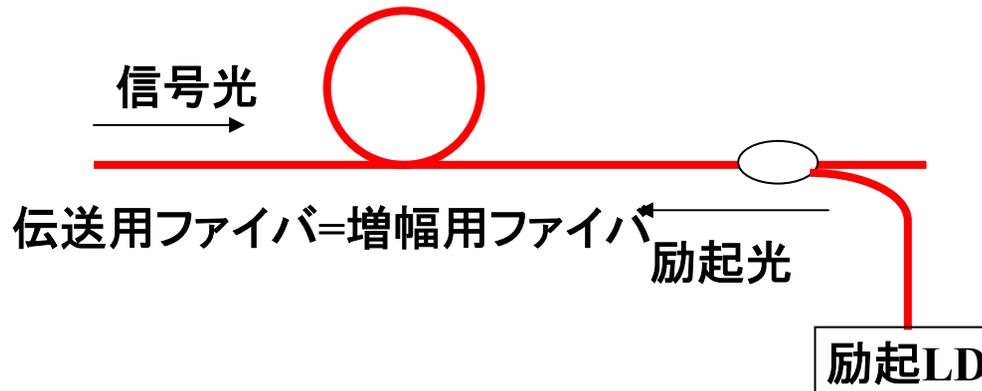
ラマン散乱:
励起光により分子振動(LOフォノン)を引き起こし、その差のエネルギーの光を散乱する現象



$$\begin{aligned}\hbar\omega_{in} - \hbar\omega_{out} &= \hbar \cdot \omega_{LO} = \hbar \cdot 2\pi(f_{in} - f_{out}) \\ &= \hbar \cdot 2\pi \cdot 13\text{THz}\end{aligned}$$

波長では約100nm

ラマン増幅中継器の構成



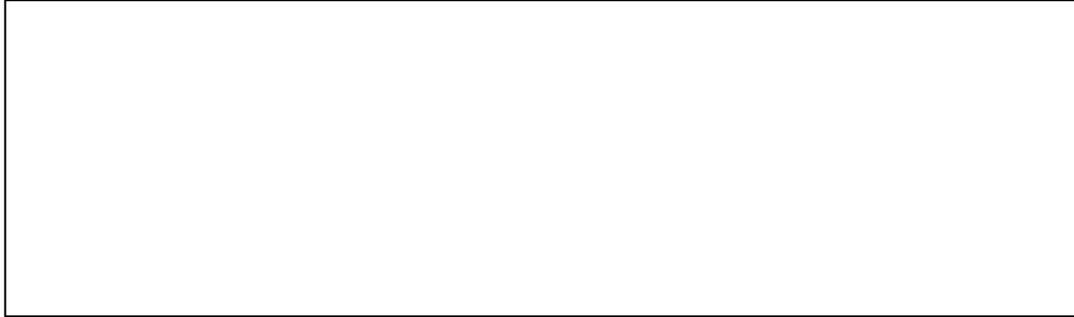
メリット

- 伝送用光ファイバを増幅用ファイバとして使用可能
- 任意の信号光が増幅可能

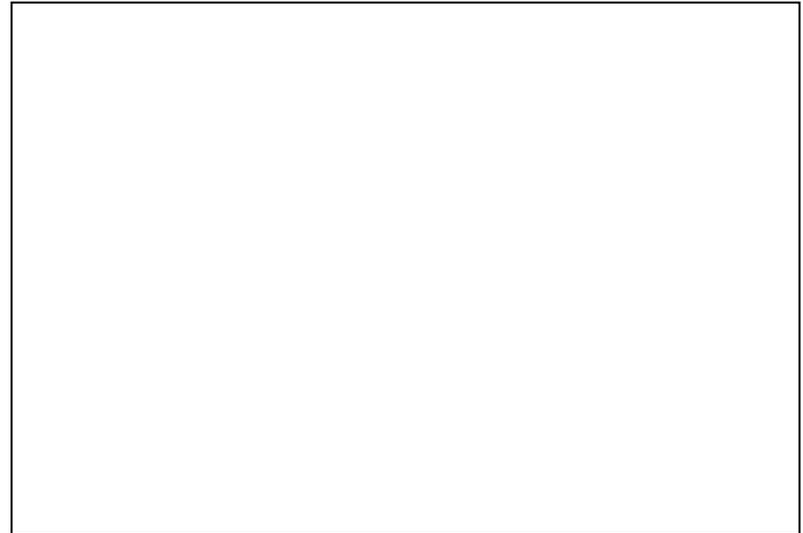
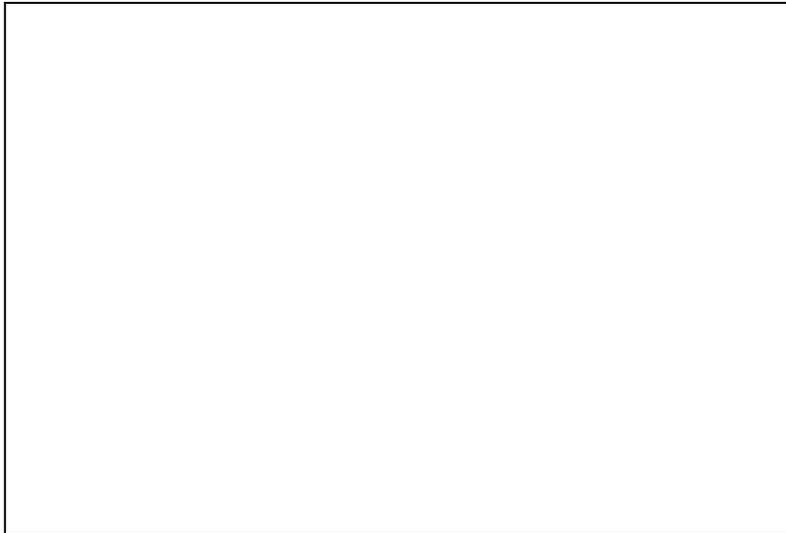
課題

- 長尺ファイバが必要(10km以上)
- 雑音特性の励起方向依存性

田中, 鳥居, 幸, 中元, 内藤, 横田, 2003年信学ソ大, B-10-113 (2003).



4.23Tbps, 120km伝送

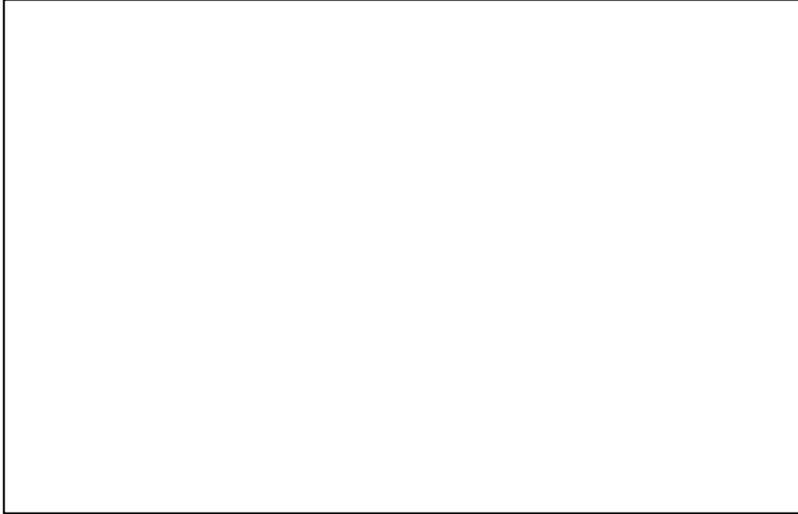


EDFAの広帯域化の進展(1)

H. Masuda, A. Sano, T. Kobayashi, E. Yoshida, Y. Miyamoto, Y. Hibino, K. Hagimoto, T. Yamada, T. Furuta, and H. Fukuyama, OFC2007, PDP20.

ハイブリッドラマン・EDFA: ラマン増幅器とEDFAを組み合わせ、広帯域と高利得を実現





H. Masuda, A. Sano, T. Kobayashi, E. Yoshida, Y. Miyamoto, Y. Hibino, K. Hagimoto, T. Yamada, T. Furuta, and H. Fukuyama, OFC2007, PDP20.

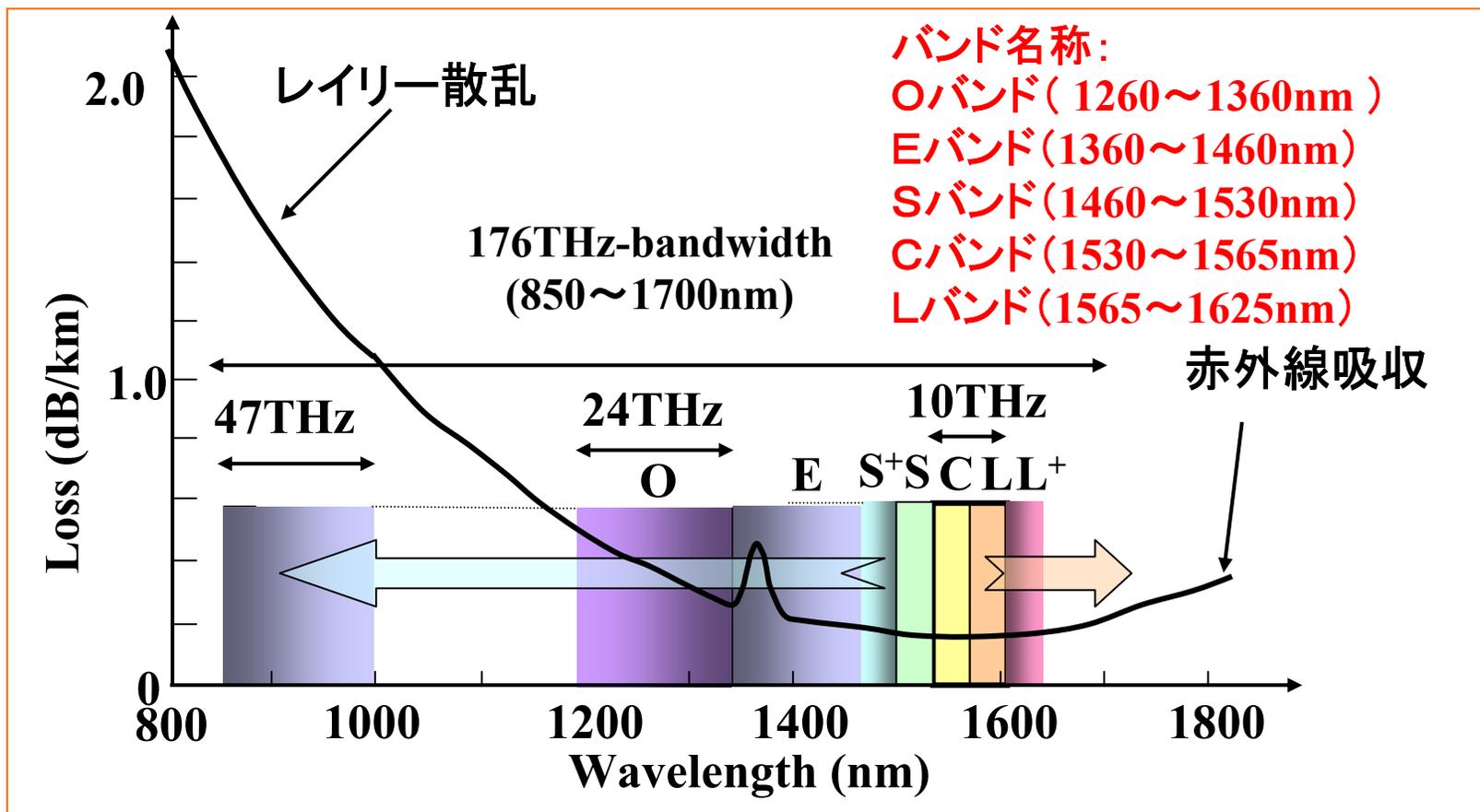
第8章

波長多重伝送技術

1. WDM伝送と分散マネジメント
2. 波長多重(WDM)伝送と変調方式
3. 分散補償器

DWDMと使用波長(光源波長)

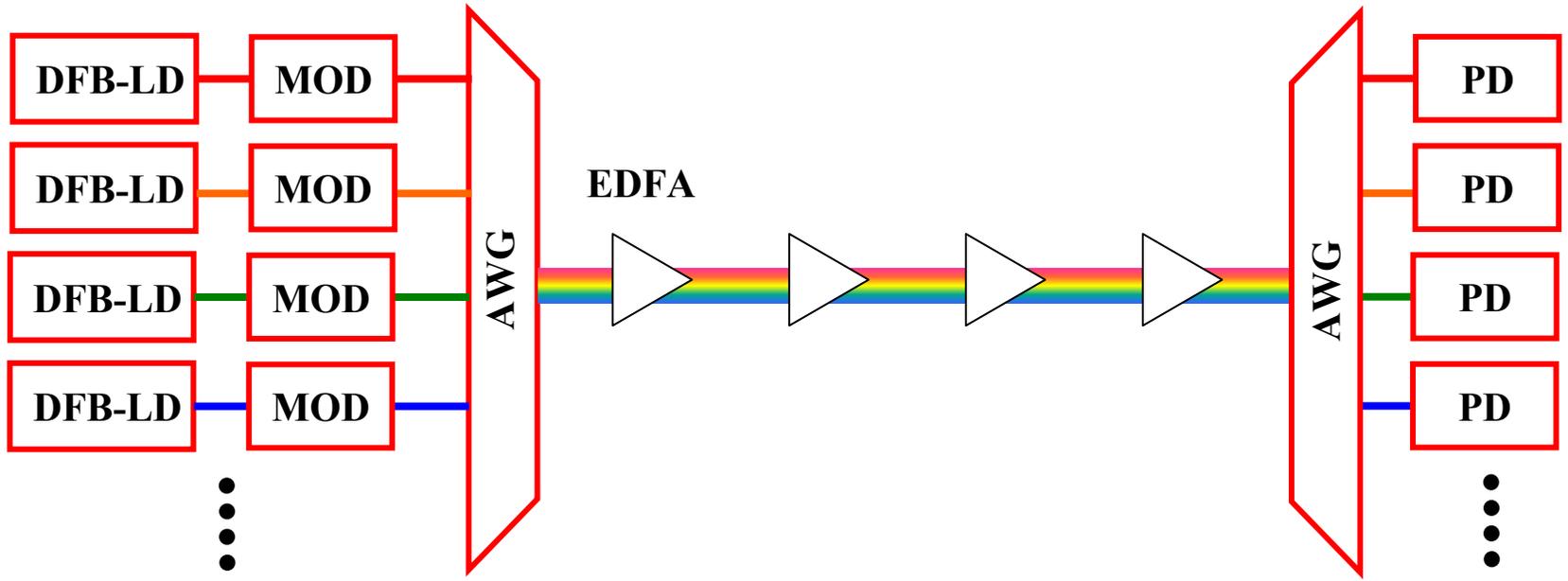
DWDM : Dense Wavelength Division Multiplexing (高密度波長多重技術)



周波数間隔:100GHz → 波長間隔:0.8nm間隔@1550nm帯 に相当

波長多重伝送の構成

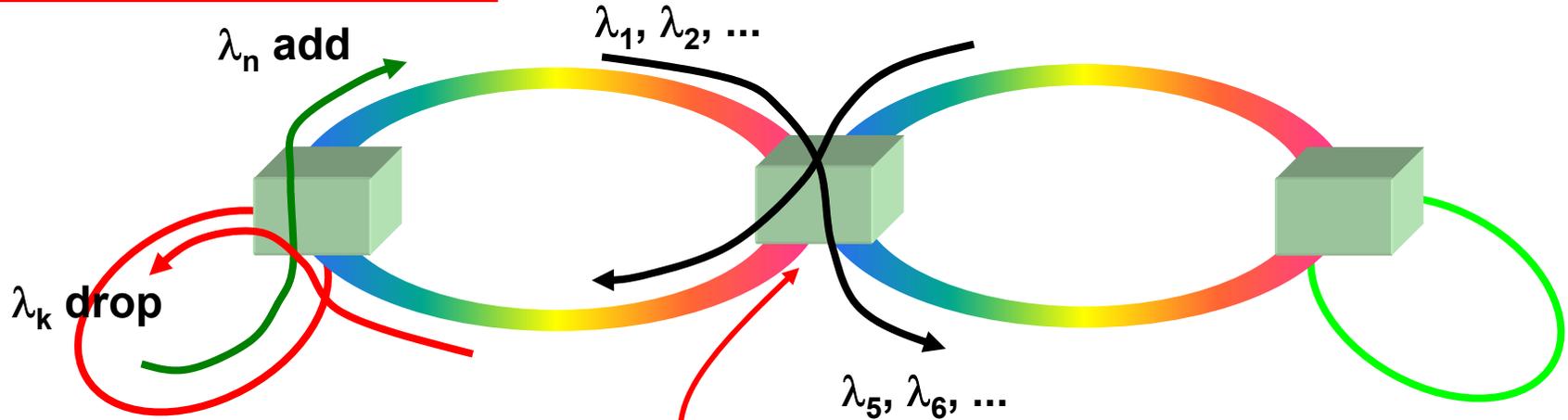
Point-to-Point



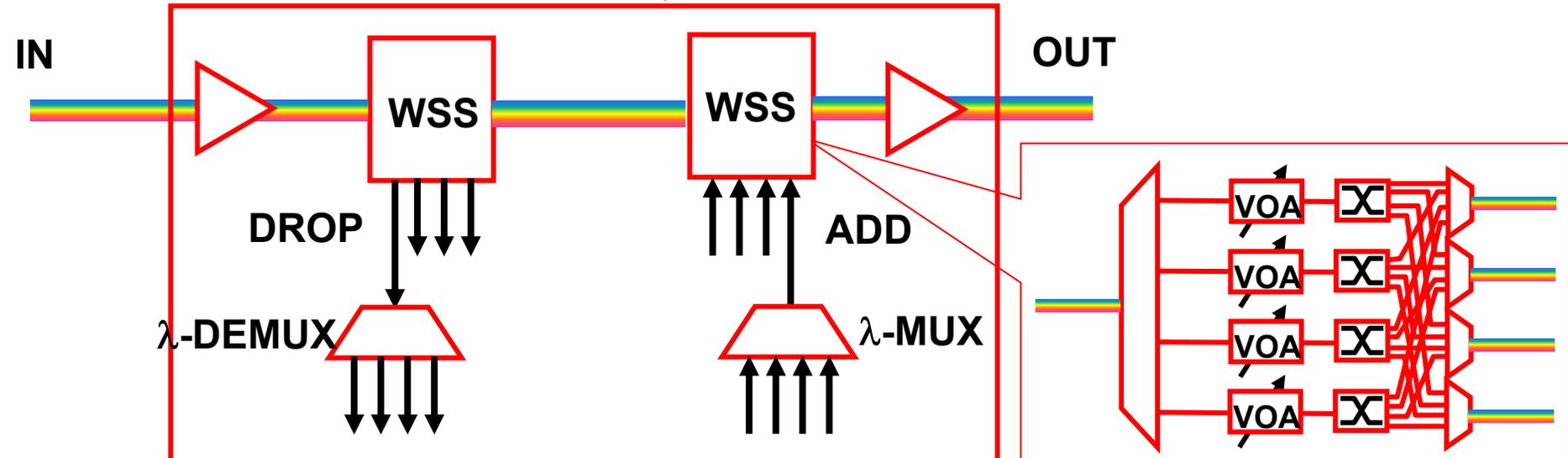
AWGを多段中継するリングネットワーク

多段フィルタ中継構成

Interconnected Ring Network Topology



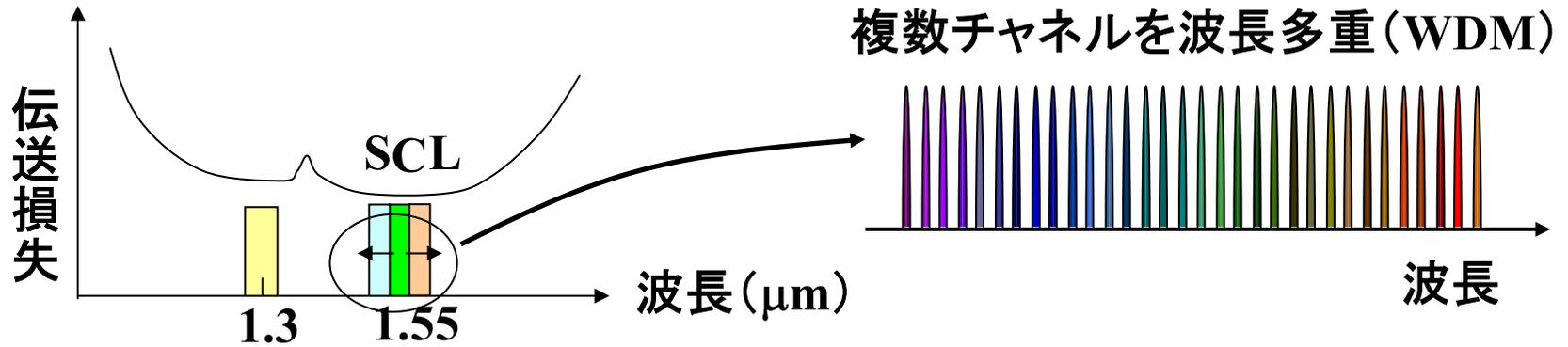
ROADM : Reconfigurable Optical Add-Drop Multiplexer



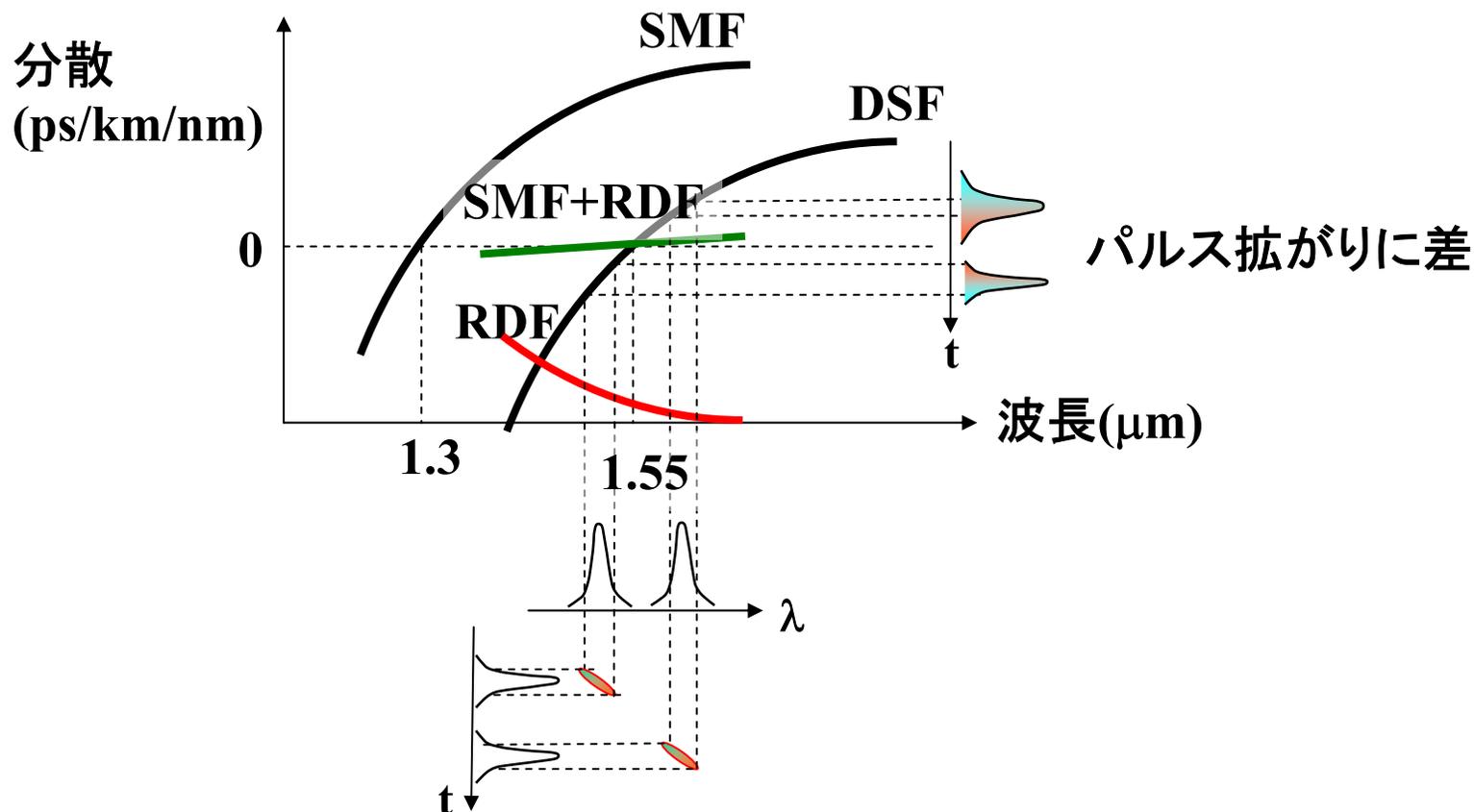
※ WSS : Wavelength Selective Switch

波長多重(WDM)と分散マネジメント

大容量化のための技術的アプローチ



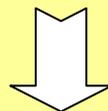
技術要素	現在の状況	課題	検討案
① 1波あたり伝送速度の高速化	10Gbps→40Gbps	高速電子回路の実現	InP系、SiGe系
② 使用波長帯域の広帯域化	S, C, Lバンドの使用 トレードオフ	誘導ラマン散乱によるパワーチルト	分布ラマン増幅による光強度の補正
③ 多チャネル化	100GHz間隔 →50GHz間隔	変調周波数とのトレードオフ	CS-RZ, DQPSK など狭帯域変調方式の検討



WDM使用帯域の拡大

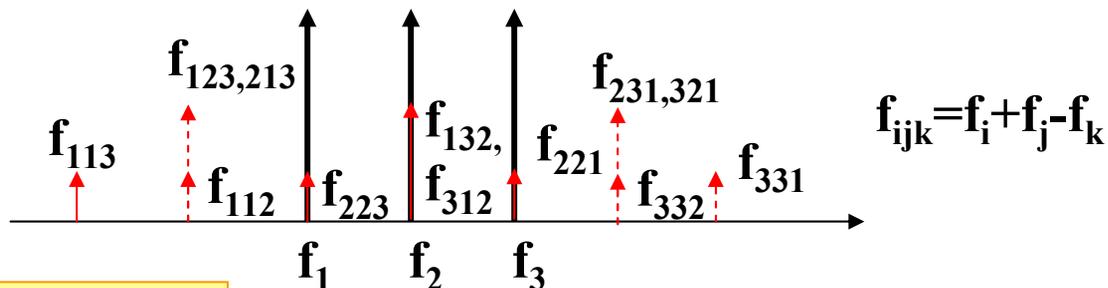


広い波長範囲でトータルの波長分散零の条件を満たしている必要がある。



波長分散の波長依存性(分散スロープ)の低減が重要

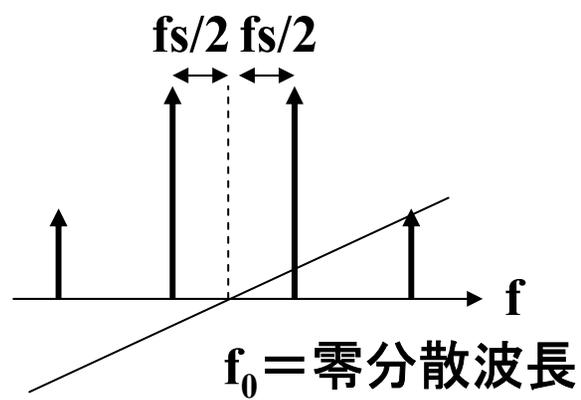
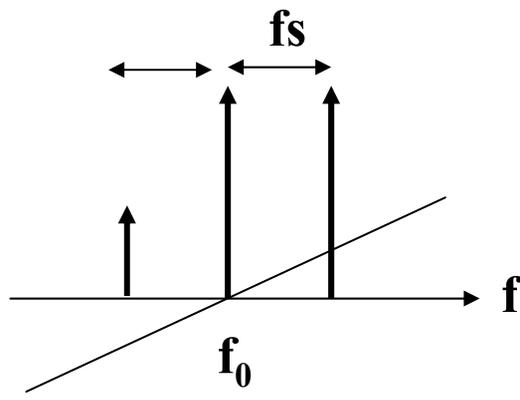
4光波混合の影響



光ファイバの3次非線形効果

$f_{ijk} = f_i + f_j - f_k$ を満足する波長の発生効率は位相整合条件 $\Delta\beta = \beta(f_i) + \beta(f_j) - \beta(f_k) - \beta(f_{ijk}) = 0$ を満たす場合に最大となる。

- ① 動作波長が零分散波長と一致
- ② 零分散波長をはさんで等間隔



4光波混合光のクロストークによる信号伝送特性劣化 \Rightarrow 分散はある程度の大きさが必要

4光波混合の発生

発生光のパワー

$$P_{ijk}(L) = \eta_{ijk} \kappa^2 (B \chi_3)^2 P_i(0) P_j(0) P_k(0) \exp(-\alpha L)$$

ただし

$$\kappa = \frac{32\pi^2 L_{eff} / A_{eff}}{n^2 \lambda c}$$

$$\eta_{ijk} = \left(\frac{\alpha^2}{\alpha^2 + \Delta\beta^2} \right) \left[1 + \frac{4 \exp(\alpha L) \sin^2(\Delta\beta L / 2)}{\{1 - \exp(-\alpha L)\}^2} \right] \quad (\text{発生効率})$$

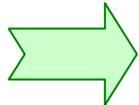
$$\Delta\beta = \beta(\nu_i) + \beta(\nu_j) - \beta(\nu_k) - \beta(\nu_{ijk})$$

$$= \begin{cases} \frac{2\pi\lambda^2}{c} (\Delta\nu_{eq})^2 D & (\text{零分散波長と一致しない場合}) \\ \frac{\pi\lambda^4}{3c^2} \frac{dD}{d\lambda} \{(\nu_{ijk} - \nu_0)^3 - (\nu_i - \nu_0)^3 - (\nu_j - \nu_0)^3 + (\nu_k - \nu_0)^3\} & \Delta\nu_{eq} = \sqrt{|(\nu_i - \nu_k)(\nu_j - \nu_k)|} \\ & (\text{零分散波長と一致or近傍の場合}) \end{cases}$$

① 動作波長が零分散波長と一致しない場合

$\lambda=1.55\mu\text{m}$, $L=10\text{km}$, $D=15\text{ps/nm/km}$ の場合、

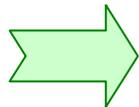
$$\Delta\nu_{\text{eq}} > 50\text{GHz} \text{にて } \eta_{ijk} < 1\%$$



波長間隔を大きくすることにより4光波混合を抑制可能

② 動作波長が零分散波長と一致あるいはきわめて近傍の場合

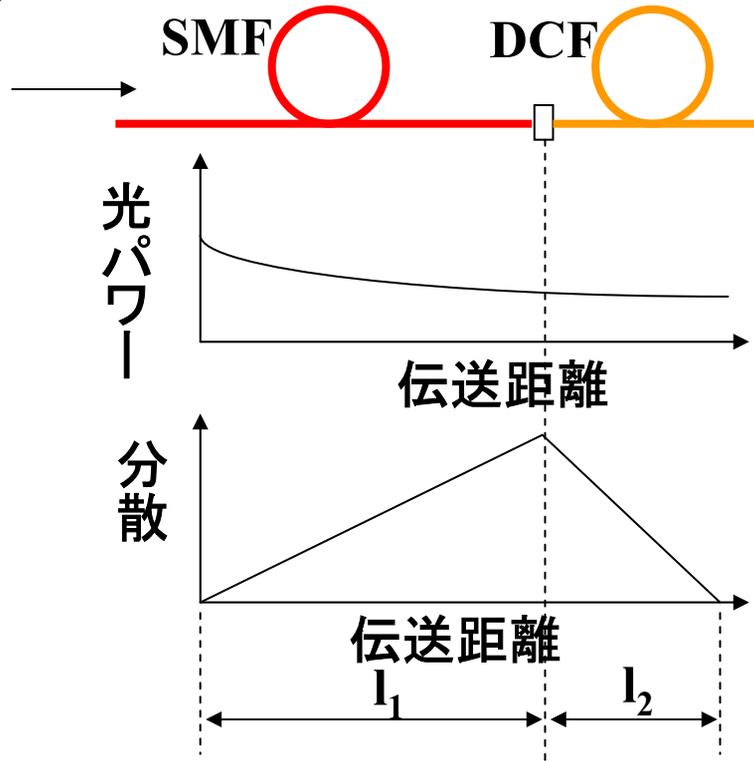
$\Delta\beta = 0$: 位相整合条件 を満たす



$$\eta_{ijk} \doteq 100\%$$

4光波混合によるコヒーレントクロストークの影響大

分散マネジメント伝送 (SMF+DCF/SMF+RDFなど)

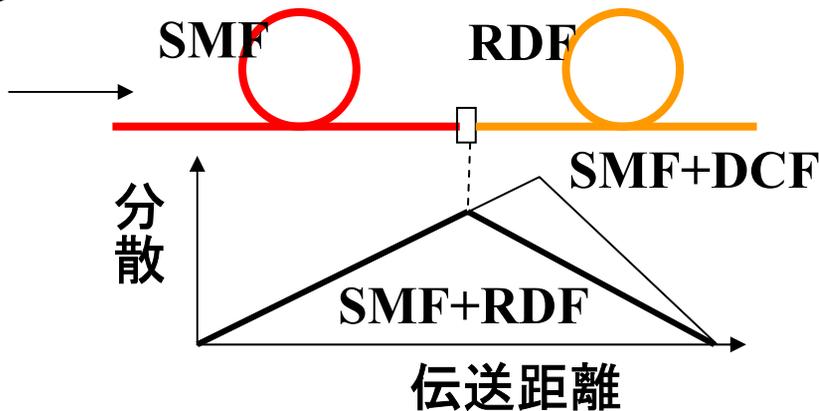


ポイント

- ① SMF+DCFによりトータルの分散を零化
- ② 分散を持つファイバの使用により FWM抑制
- ③ 光パワーの弱くなる後半部分にコア径の小さい(非線形の起きやすい)DCFを配置

補足

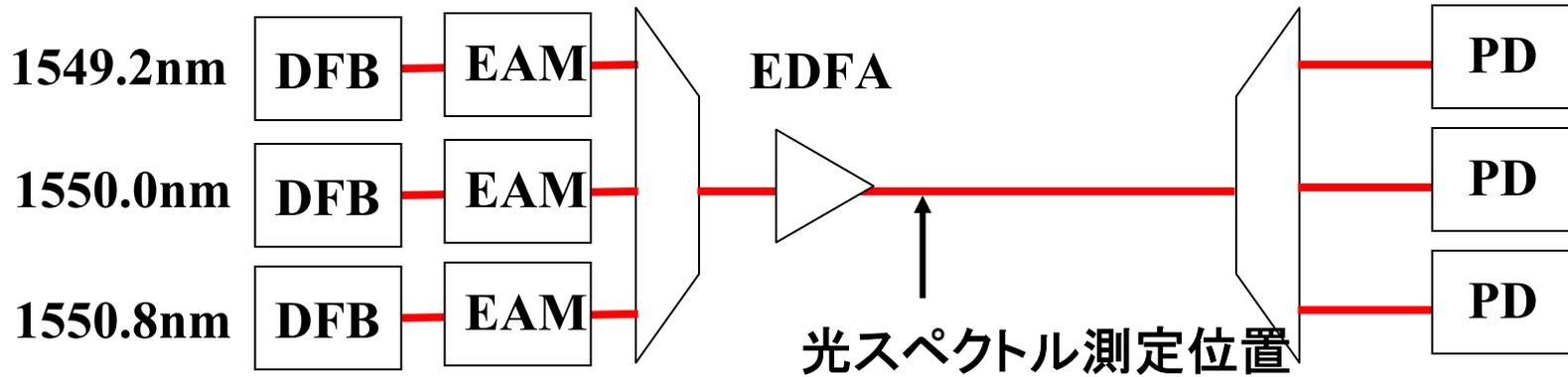
- ① DCFの伝送損失はSMFより大のため 伝送損失の低い純石英コアファイバ (PSCF) を使用し伝送路平均損失を低減



ポイント

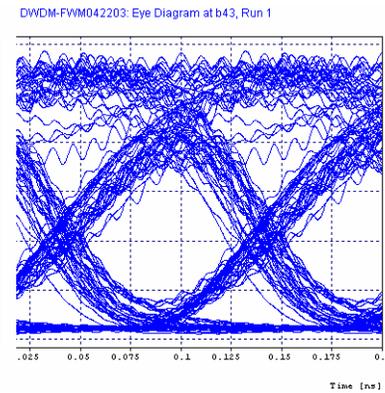
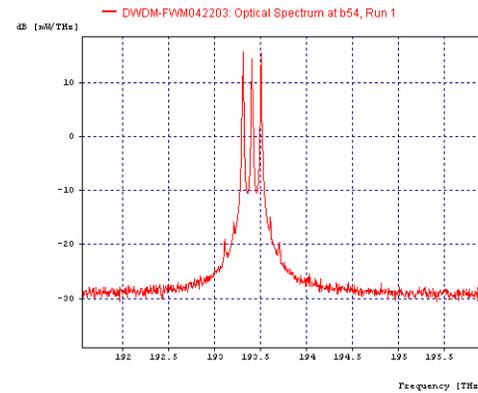
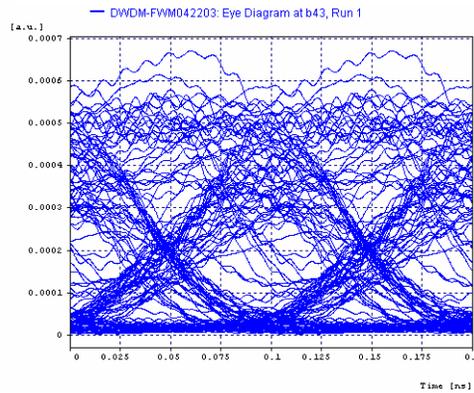
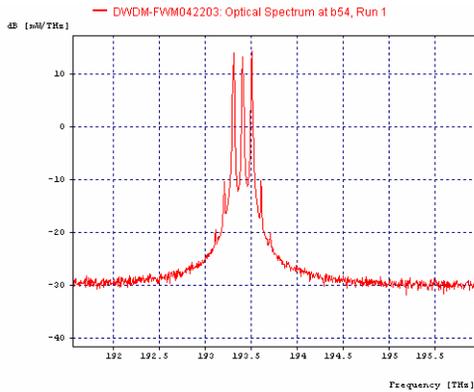
- ① SMF+RDFにより局所分散累積の低減

FWMの影響(解析例)

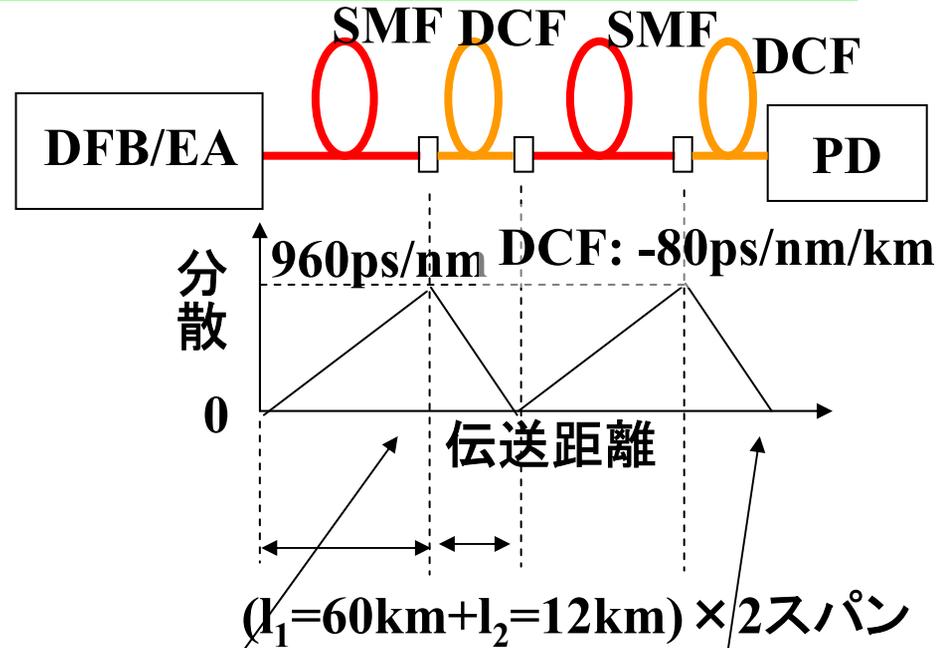
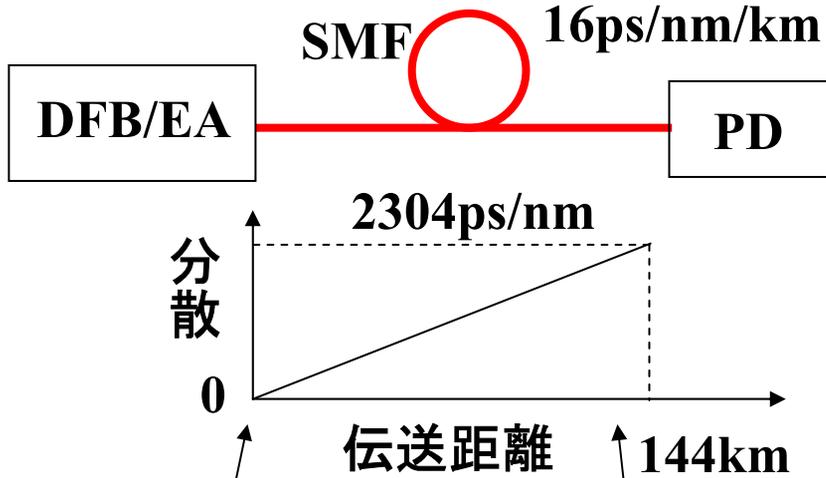


① DSF
(分散2km/nm/km) 88km

② NZ-DSF(分散8ps/nm/km) × 80km
+DCF(分散-80ps/nm/km) × 8km



分散マネジメント伝送路の効果 (解析例)

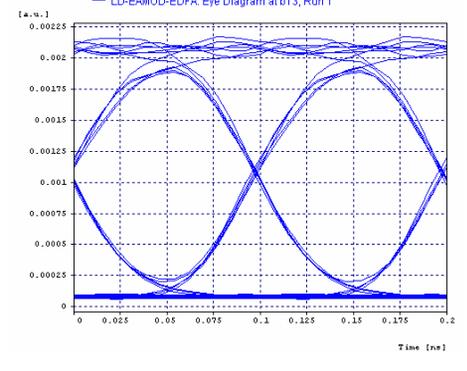
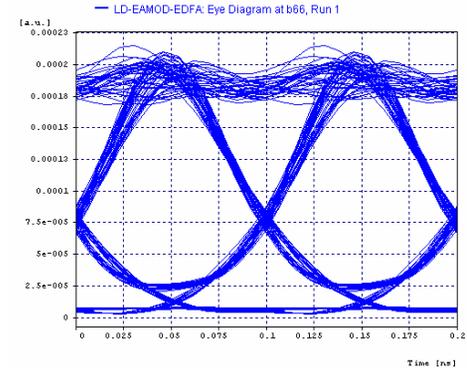
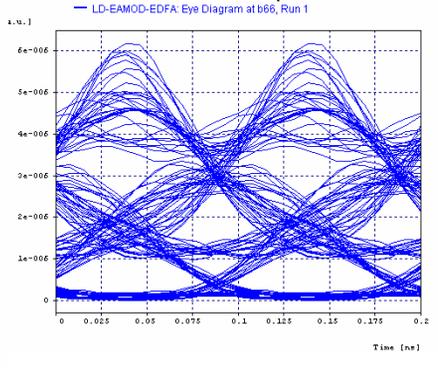
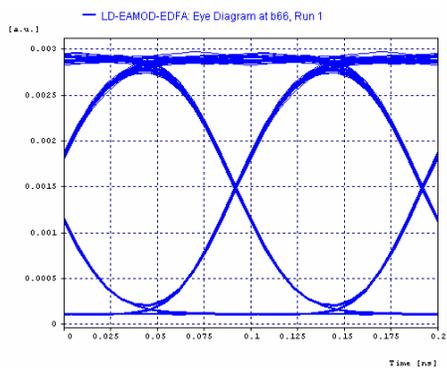


0km

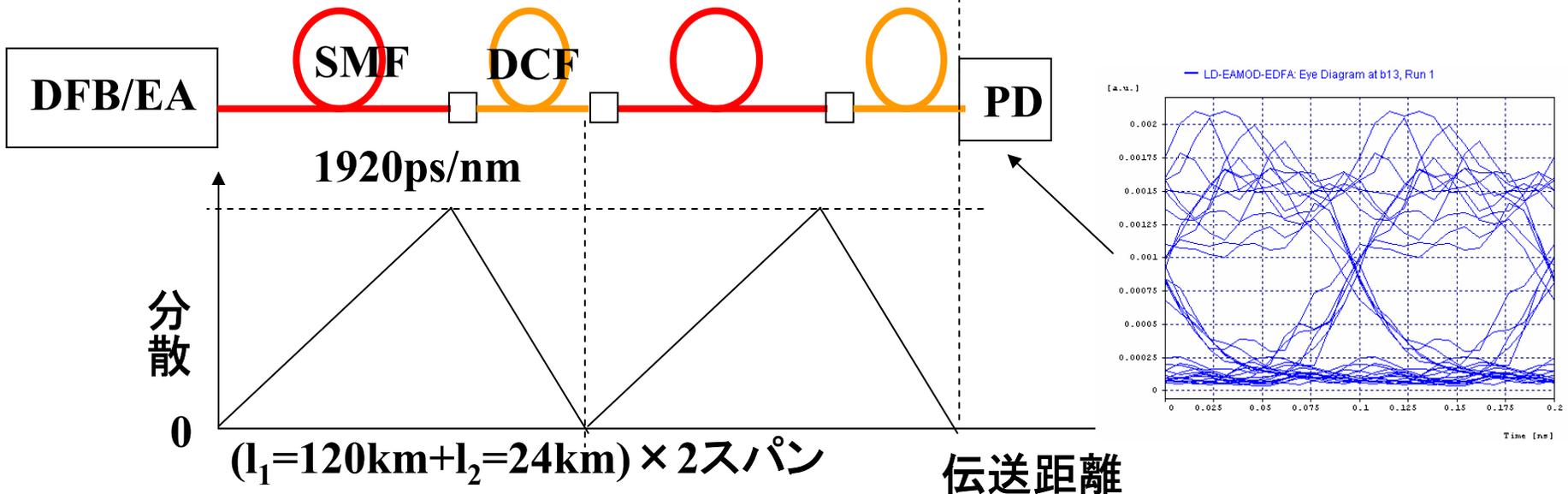
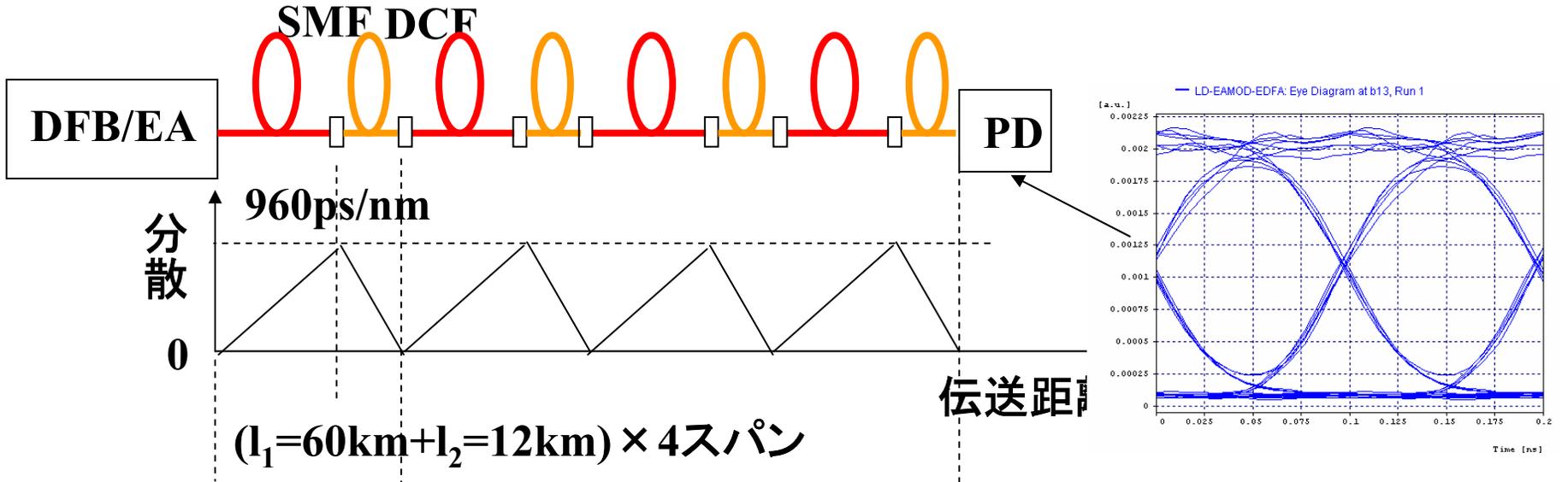
144km

60km

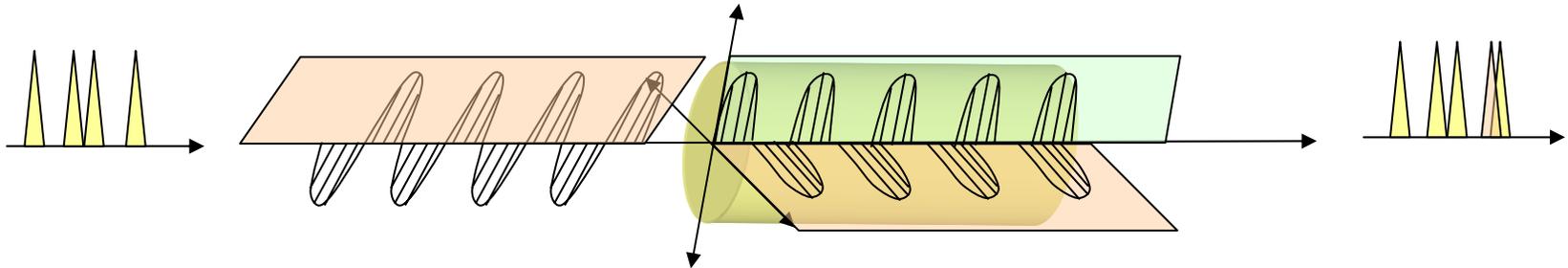
144km



分散マネジメント伝送路における累積分散の影響

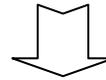


偏波モード分散



- ・コア形状のわずかな歪み
- ・ガラス中の残留応力
- ・外力

偏波モード間に群遅延時間の差が発生



- ・偏波モードごとの到着時間に差
- ・伝送距離を制限

(例)

偏波モード分散: $0.05\text{ps}/\sqrt{\text{km}}$

到着時間差の時間平均としてタイムスロットの30%を許容限度とした場合、

- ・40Gbpsにおいて22,500kmの距離制限 → 海底系もOK
- ・160Gbpsにおいて1,400kmの距離制限 → $0.02\text{ps} / \sqrt{\text{km}}$ 以下が必要 @ 6,000km

波長多重 (WDM) と変調方式

高周波数利用効率

周波数利用効率: $f_0/\Delta f$ の向上を目指す。

→ **狭帯域変調方式 (NRZ, CS-RZ, DQPK)**

(例) 0.8bps/Hzの時、40Gbps, 50GHz間隔

→ SCL3波長帯の伝送帯域上限16THz × (0.8bps/Hz) = **12.8Tbps**

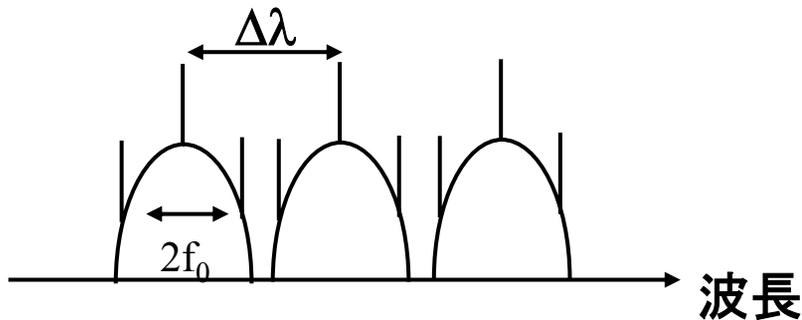
① 波長間隔が変調周波数よりも十分広い場合

$$\Delta f = -\frac{c}{\lambda^2} \Delta\lambda \gg 2f_0$$

$\Delta\lambda$: DWDMの波長間隔

Δf : DWDMの周波数間隔

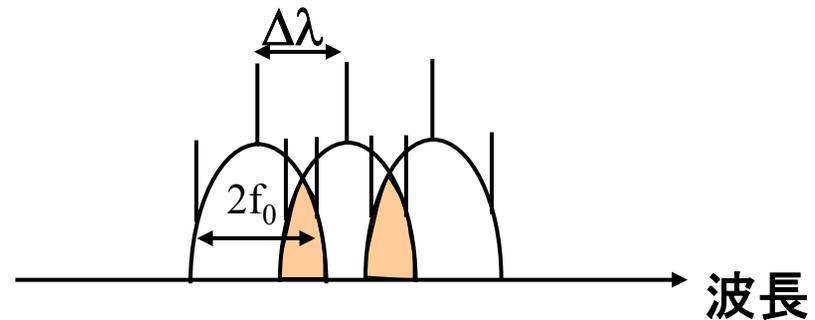
f_0 : 変調周波数



② 波長間隔が変調周波数に対して狭くない場合

$$\Delta f = -\frac{c}{\lambda^2} \Delta\lambda < 2f_0$$

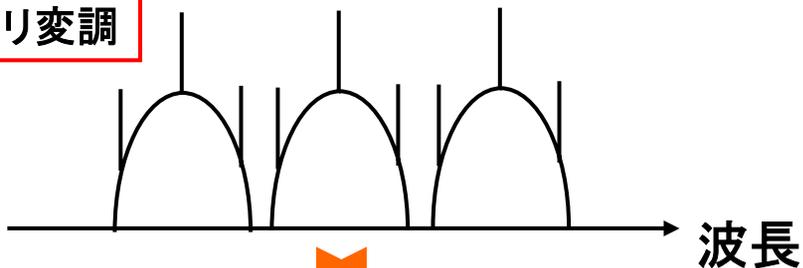
隣接チャネルのバンドが重なってしまい、クロストークとなる



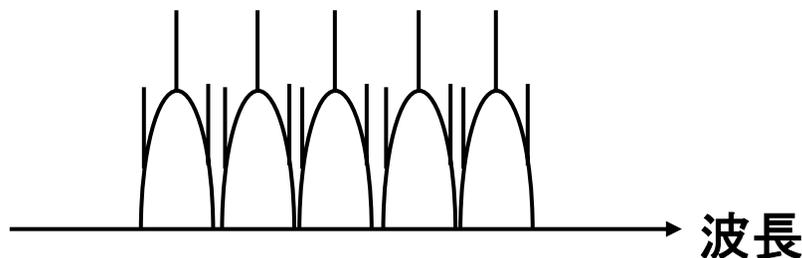
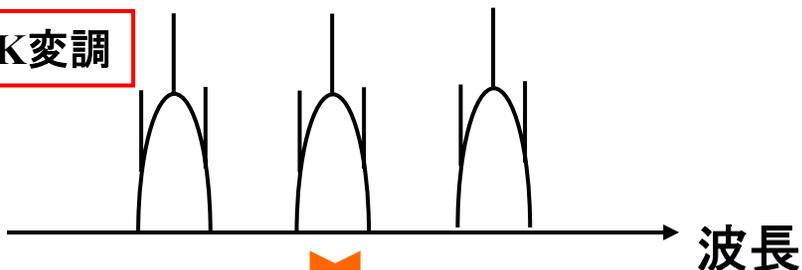
バイナリ(2値)から多値変調へ

(例)DQPSK変調

バイナリ変調



DQPSK変調



30nm帯域, 0.8bps/Hzの変調方式を用いる場合

バイナリ変調

10Gbps (12.5GHz or 0.1nm間隔) → 300波長

$10\text{Gbps} \times 300\text{波長} = 3\text{Tbps}$

40Gbps (50GHz or 0.4nm間隔) → 75波長

$40\text{Gbps} \times 75\text{波長} = 3\text{Tbps}$

伝送容量は変わらない!

DQPSK変調

位相4値なので、バイナリ変調の半分の帯域で
同じ伝送容量を実現

$40\text{Gbps} = 20\text{Gbps} \times 2$

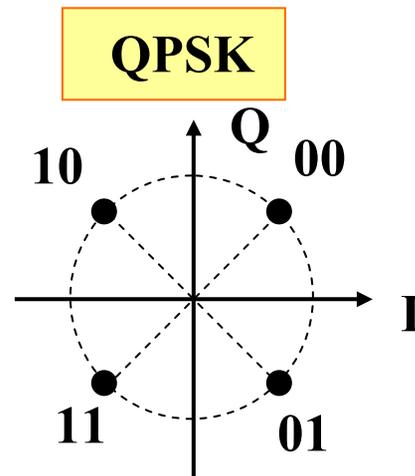
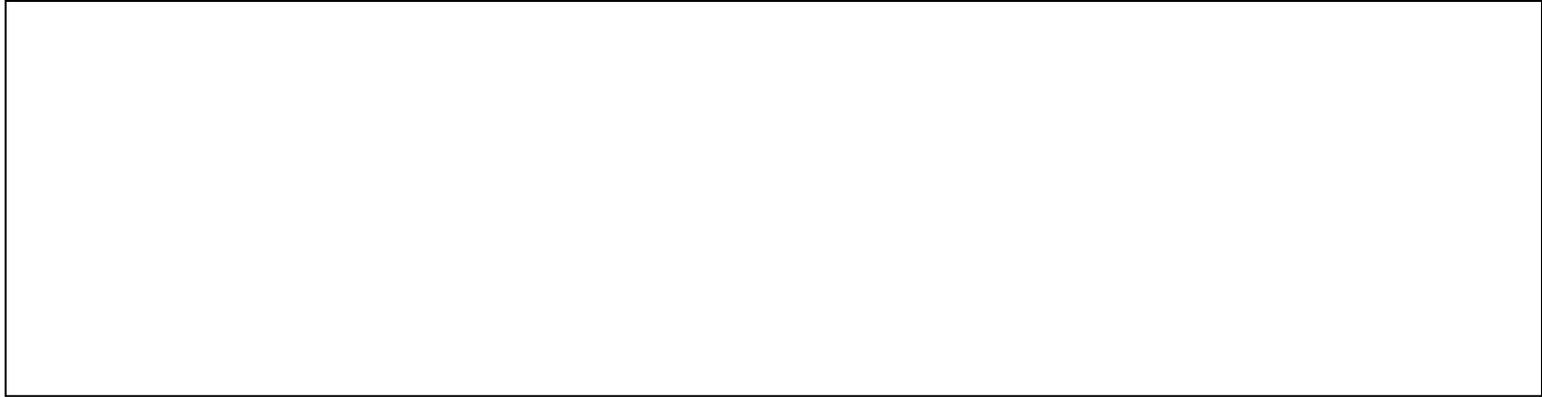
20Gbps (25GHz or 0.2nm間隔) → 150波長

$40\text{Gbps} \times 150\text{波長} = 6\text{Tbps}$

伝送容量倍増!

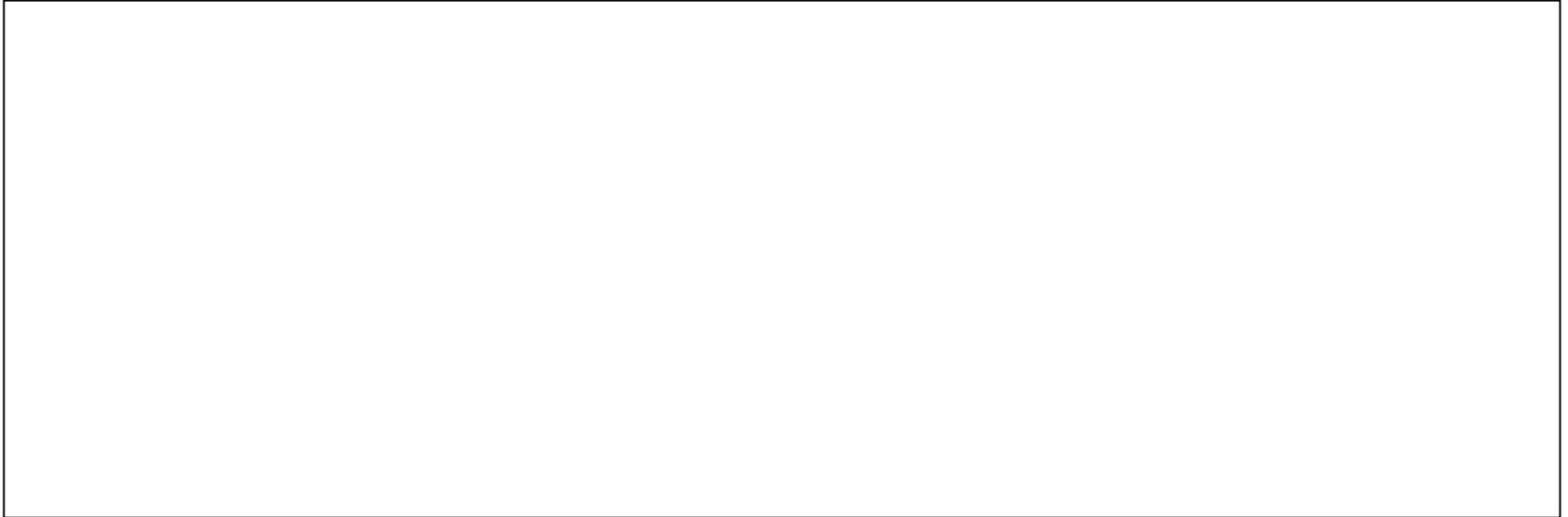
R.A. Griffin, OFC2005, OWE3.

DQPSK : Differential Quadrature PSK



1シンボル2ビット

R.A. Griffin, OFC2005, OWE3.



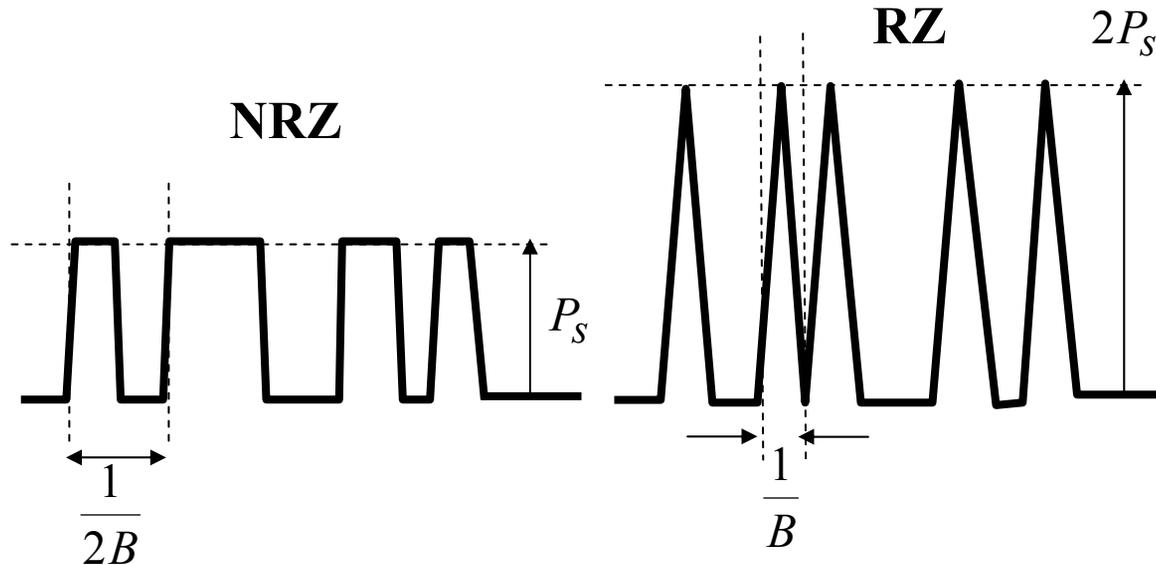
スペクトル利用効率 **2.5bps/Hz**の報告

S. Tsukamoto, D.-S. Ly-Gagnon, K. Katoh and K. Kikuchi, OFC2005, PDP29.

光雑音耐性

同一受信感度に対するSN比の差

→ **高SN比(高受信感度)の変調方式の選択(RZ, DPSK)**



平均受信感度 P_{ave} を用いてRZ・NRZのSNRを比較する。

$$SNR = \left(\frac{e\eta i \frac{GP_s}{\hbar\omega}}{\frac{\sqrt{\sigma_{s,shot}^2 + \sigma_{sp,shot}^2 + \sigma_{s-sp}^2 + \sigma_{sp-sp}^2 + \sigma_{th}^2} + \sqrt{\sigma_{sp,shot}^2 + \sigma_{sp-sp}^2 + \sigma_{th}^2}}{2}} \right)^2$$

$P_s : RZ = NRZ \times 2$ (ピーク強度)

$\sigma_{s,shot}^2, \sigma_{s-sp}^2 : RZ = NRZ \times 4$ (ピーク強度&帯域)

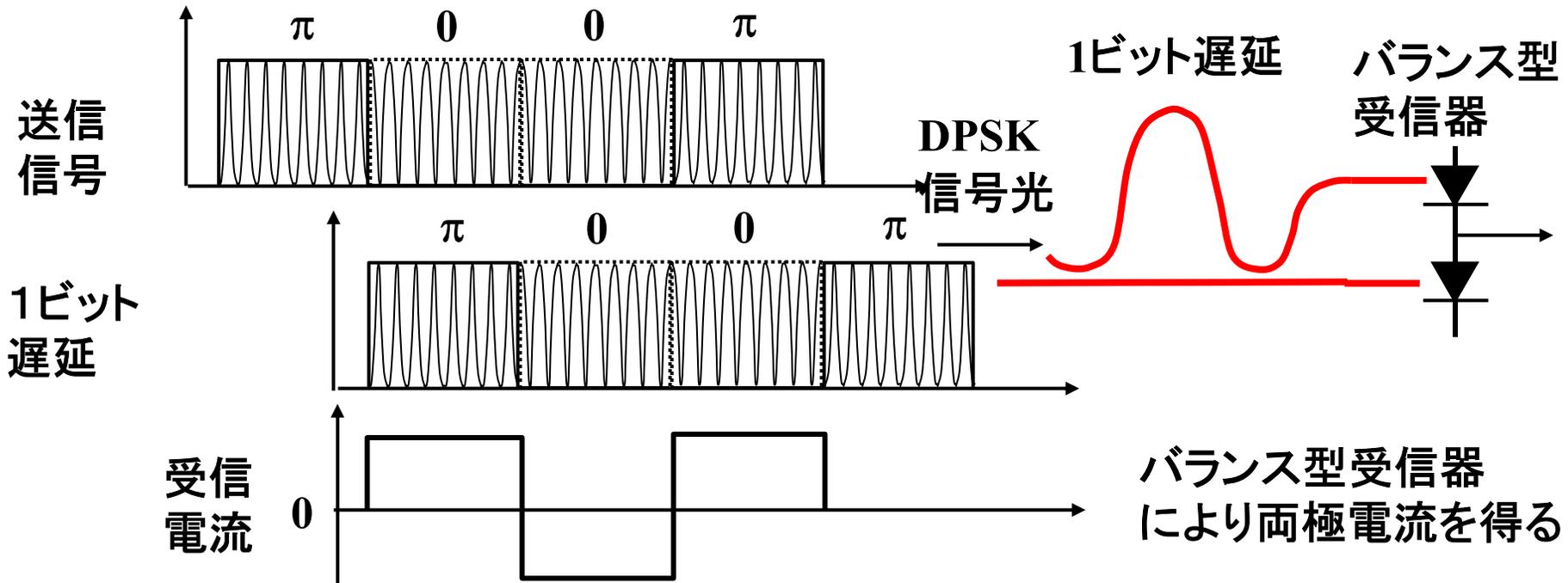
$\sigma_{sp,shot}^2, \sigma_{sp-sp}^2, \sigma_{th}^2 : RZ = NRZ \times 2$ (帯域)

より、 $SNR(RZ) > SNR(NRZ)$

DPSK変調

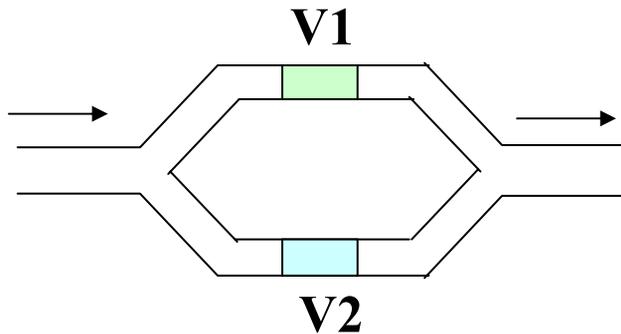
DPSK (Differential Phase-Shift-Keying, 差動位相シフトキーイング方式)

- PSK変調の1種でデータ1を隣接ビット間の位相差 π 、データ0を隣接ビット間の位相差0に割り当てたもの。
- 40Gbps DWDMの長距離・受信感度改善を目的にこの5~6年急激に取り組みが盛んになってきた。



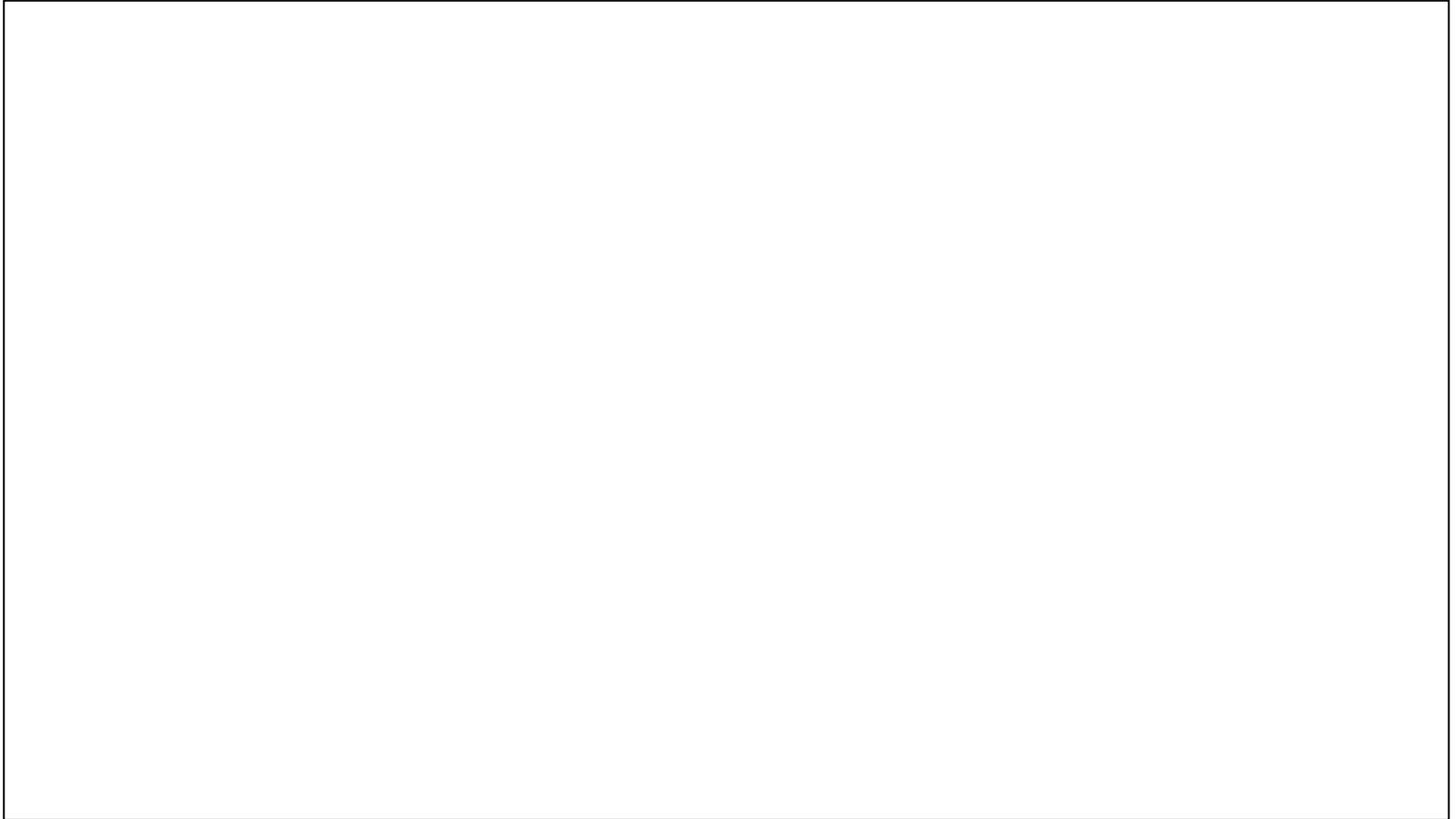
バランス型検波器により光位相0, π を電気レベル+1, -1に変換
→ 電圧0に閾値を設定でき、レベル0,1の受信より感度を3dB改善可能

差動駆動型
MZMを用いた場合



DPSK変調信号の受信器

A.H. Gnauck, OFC2004 Tutorial, TuF5.



40Gbps RZ-DPSK伝送実験例

A.H. Gnauck, OFC2004 Tutorial, TuF5.



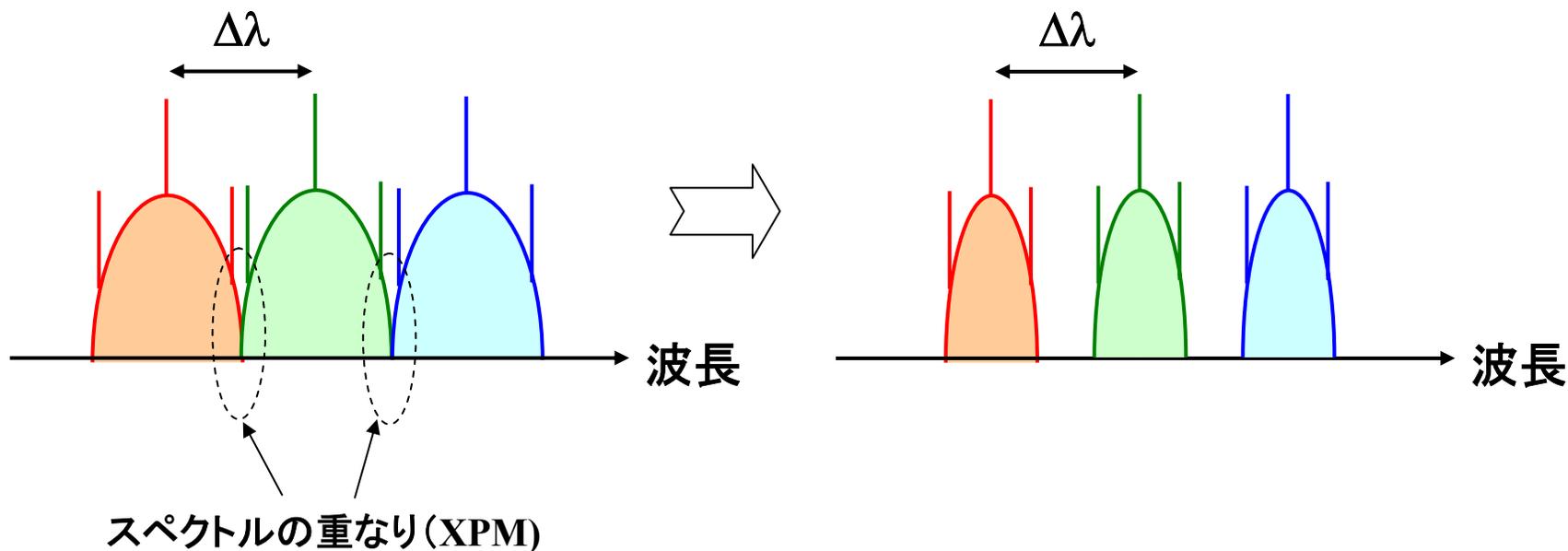
隣接波長チャンネル間クロストーク耐力

隣接チャンネル間の相互作用(XPM)の低減

→ 隣接チャンネル間のスペクトル重なりを極力避ける

→ **狭帯域の変調方式の採用**

(2値: CS-RZ, Duobinary) (多値: DQPSK)



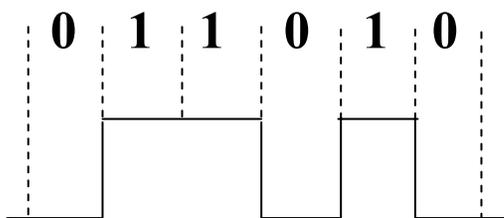
非線形耐力

光ファイバ伝送中の自己位相変調(SPM)による分散の影響を抑える。

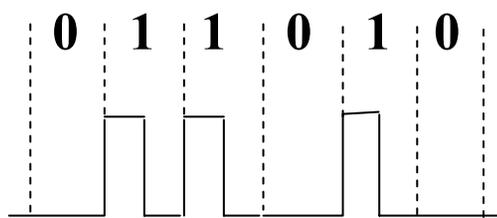
→ ・送信光平均パワーのなるべく小さな変調方式

(例1) NRZはRZの半分の帯域で済むので変調効率の観点では有利だが、1インターバルの平均光パワーが倍のため非線形耐力は劣る。

NRZ



RZ



PMD耐性

DVD (Differential Velocity Delay) による波形歪の影響の大小
→ 変調波形形状依存

耐性: RZ > NRZ

10Gbps NRZ



10Gbps RZ

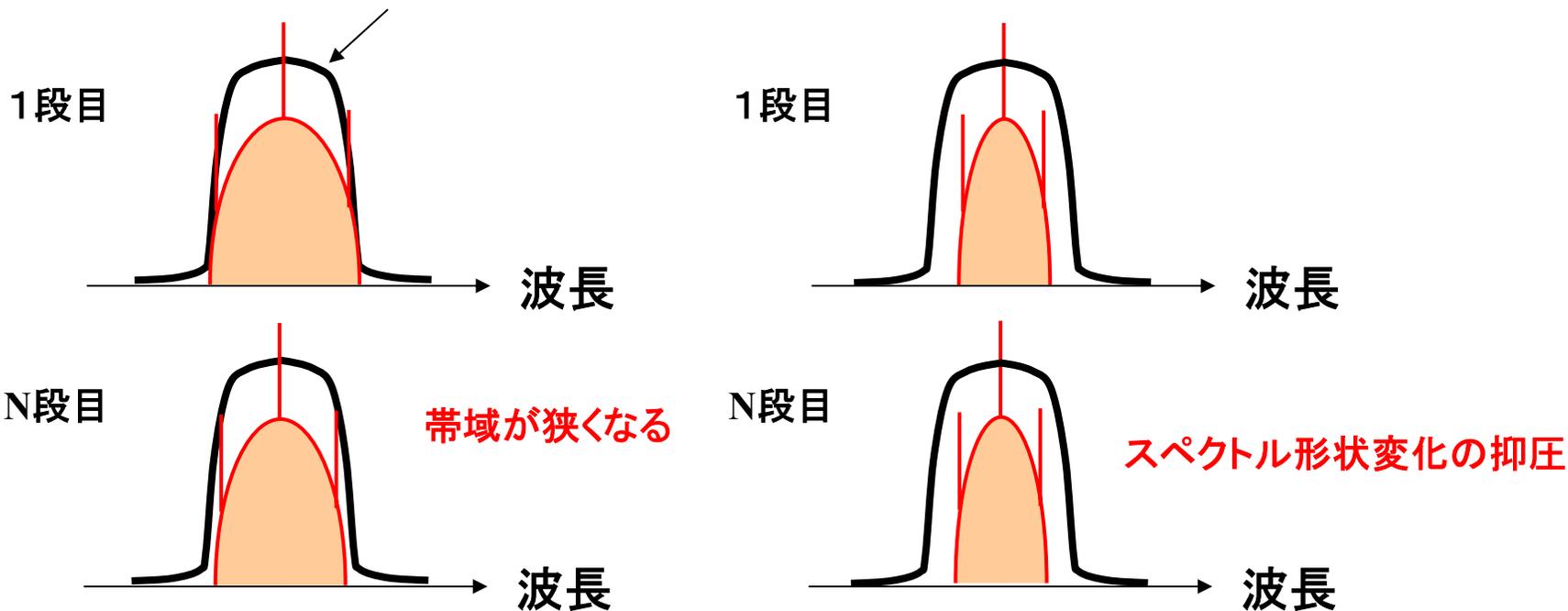


多賀, 鈴木, 波平, 2000年信学会総合大会, SB-8-7 (2000).

波長フィルタ多段透過耐性

多段フィルタによるスペクトル形状変化・波形劣化
化→**狭帯域スペクトルの変調方式**
(2値: CS-RZ, Duobinary) (多値: DQPSK)

波長フィルタの透過スペクトル



変復調方式の比較(40Gbps以上)

参考文献: 尾中(富士通), NGN時代の光技術・産業懇談会第1回公開討論会資料(2007.5.15)

	NRZ	Duobinary	CS-RZ	RZ-DPSK	RZ-DQPSK
光スペクトル形状					
光雑音耐力	悪い	悪い	中	非常によい	よい
波長分散耐力	中	よい(線形領域では)	中	中	よい
PMD耐力	悪い	中	中	中	よい
光学非線形耐力	中	悪い	よい	よい	よい
OADMフィルタ透過耐力	よい	非常によい	中	中	非常によい
構成(サイズ/コスト)	小	大	中	大	大